コミンテルン第七回大会論

平田好成

一

一九一九年から一九四三年まで活動を続けたコミンテルンは、二〇世紀前半の激動する世界の歴史のなかで、国際共産主義運動を指導する一つの巨大な組織であった。コミンテルンが存在した約四分の一世紀の間に、世界の構造が大きな変容を受け、コミンテルンの出発点と終点とを比較して見た場合に、世界の構造の変化から抽出される正確なヴィジョンは、直線的発展のヴィジョンではなく、まさに、「地位と価値の根本的転倒のヴィジョン」(トリアッティ、石堂・藤沢訳『コミンテルン史論』青木文庫、一二四頁)であった。ソヴェト社会主義と帝国主義世界体制の相互関係は、コミンテルンの活動した期間に、大きな変化を見せたからであった。従って、コミンテルンの末期には、世界の構造と民衆の新しい意識、それに民衆のあらゆる運動は、客観的に見て、その後の世界情勢における新しい根本的な変化の萠芽を内包していたといえよう。第二次世界大戦後、社会主義が世界体制となって帝国主義体制を威圧し、帝国主義の植民地体制が全面的に崩壊する過程にはいり、従って、帝国主義陣営が総体的に弱体化の兆候を見せはじめている今日の世界情勢は、すべてこの新しい根本的な変化の発展・継承としてとらえることができよう。コミンテルンの歴史のなかで、この新しい根本的な変化に大きな貢献をしたのが、一九三五年七月二五日から八月二一日までモスクワで開かれたコミンテルン第七回大会であった。国際ファシズムが、中世的な暴力に依拠し、非情な反コミュニズムを最大の目標に掲げて歴史に登場し、一九三〇年代の世界

情勢を震撼させていた時期に、コミンテルンは、やや遅ればせではあったけれども、第七回大会を開いて、迫り来る戦争とファシズムに抵抗し、人類の新しい政治的・社会的進歩を守り抜く原則を樹立した。コミンテルン第七回大会の歴史的意義は、極めて重大である。何故なら、この大会で、はじめて、戦争とファシズムにたいする平和と民主主義に関する「偉大な政治戦略の方針」(トリアッティ、前掲書、一二七頁)が決定され、実践に移されたからである。コミンテルン第七回大会は、コミンテルンの歴史を通じて、最大の、そして、最高の大会であったと評価することができる。

ところで、コミンテルンに関する歴史的・論理的な研究は、外国でも日本でも、最近になってようやく本格化してきたといっていいようである。例えば、ソ連やイタリアなどで、最近、コミンテルン関係の厖大な資料の刊行がはじまり、コミンテルン研究の成果の一部が発表されはじめている。コミンテルンの歴史には、極めて積極的な側面と同時に、今日、十二分に研究されなければならない否定的な消極的側面が含まれていた。各時期に、コミンテルンがとった立場が、「全部が全部正しく、全部情勢に適合していたとはみとめられない」(トリアッティ、前掲書、一二八頁)からである。今までの研究体制は、コミンテルンの歴史研究がその特殊性を全部捨象し一般論で一本の発展過程を論述するか、個々の国や個々の鋭い革命情勢との関連でコミュニズムの生成、発展過程を記述するか、あるいは、コミンテルンの指導機関がおびただしい会議で採択した決議や指令を分析し考察するにとどまっていた。コミンテルンの歴史がもっていた積極面と消極面を織り混ぜた総合的な研究を行なうためには、単にコミンテルンの活動のプロセスを記述するだけでは不十分であって、何よりも諸事実を正確に記録したうえで、推理、価値判断等を通じて、コミンテルンの歴史の科学的分析を行なうことが必要なのである。

コミンテルン第七回大会に関しても、一九六五年の三〇周年を記念して、いくつかの労作が発表されはじめた。ソヴェトのB・レイプゾン、K・シリーニャの研究(B・レイプゾン、K・シリーニャ、石堂訳『現代革命の理論—コミンテルンの政策転換—』合同出版)などは、その代表的なものである。コミンテルン第七回大会三〇周年を記念して、一九六五年には、

モスクワとプラハで二つの国際科学会議が開かれた（一つは、一九六五年一〇月四日、モスクワで開かれたソ連科学アカデミー、ソ連共産党中央委員会付属マルクス・レーニン主義研究所、同付属社会科学アカデミー主催の科学会議であり、もう一つは、一九六五年一〇月二一日から二三日にかけてプラハで開かれた『平和と社会主義の諸問題』誌編集部、チェコスロヴァキア共産党中央委員会共催の科学会議である）。しかし、これら一連の労作や会議では、コミンテルン第七回大会それ自体の分析よりも、この大会の継承・発展形態としての第二次大戦後の情勢分析に重点がかけられており、第七回大会が萌芽としてもっていた諸命題が萌芽以上のものと考えられていたり、第七回大会と戦後の情勢が単調な一本の発展過程として描かれていたりして、十分な吟味を必要とする問題点が数多く存在している。例えば、B・レイプゾンとK・シリーニャが、第七回大会の決定が、戦術の転換であっただけでなく、資本主義の独占段階の深い分析から生まれた新しい戦略方針であり、「現代における民主主義と平和のための闘争と、社会主義のための闘争との接近を基礎づけた」（B・レイプゾン、K・シリーニャ、前掲書、二二頁）と定式化している点などは、十分に再検討して見る必要があろう。コミンテルン第七回大会当時の世界および各国の嵐のような客観情勢と民衆諸運動の主体的条件を厳密に科学的に分析することが、緊急に必要な研究条件であると考えられる。

二

コミンテルン第七回大会は、一方で、ソヴェト社会主義建設が着々と進み、軍事的にも政治的にも精神的にも国際ファシズムに十分に抵抗できるほど強力になり、他方では、資本主義世界体制が、世界経済恐慌でその土台を震撼され、未曽有の階級闘争と民族解放運動の昂揚に直面して、ファシズムの攻勢と戦争の脅威へ脱出口を求めていたとき、また、一方では、ドイツ・ナチズムが劇的な勝利をおさめ、他方では、フランス、オーストリア、スペイン、イタリア、中国等で、反ファシズム運動の豊かな経験が蓄積されつつあったときに開催された。モスクワで開かれたこの大会には、六五か国か

ら五一〇名の代表が参加した。大会の主要な議題は、W・ピークのコミンテルン執行委員会活動報告、A・アンガレティスのコミンテルン統制委員会活動報告、G・M・ディミトロフのファシズムの攻勢とファシズムに抗する労働者階級の統一のための闘争におけるコミンテルンの任務、E・エルコリ（P・トリアッティ）の帝国主義戦争の準備とコミンテルンの任務、D・Z・マヌイルスキーのソ連邦における社会主義建設の成果の五つであった。コミンテルン第七回大会の中心課題は、迫り来るファシズムの攻勢と戦争の脅威にたいして、国際労働者階級がどのように闘ったらいいかという課題、すなわち、「統一戦略」（トリアッティ、前掲書、一五八頁）をどのように設定して、究極の社会構造の変革目標に接近するかという課題であった。

コミンテルン第七回大会は、当初、一九三四年下半期に開くことが予定されていた。しかし、大会は、現実には、一年足らずも延引された。ファシズムの攻勢と戦争の脅威にたいして有効適確に闘争するためには、今までのコミンテルンが蓄積してきた理論と実践を再検討し、とくに、ファシズムの攻勢と戦争の脅威に抵抗して、コミンテルン各支部が築きつつあった新しい経験を十二分に吟味し、その積極面と消極面を余すところなく吸収して、正しい反戦、反ファシズムの指導理念と活動方針を引き出すために、十分な時間と討議が必要だったからである。従来のコミンテルンの決定した諸命題には、新しい客観情勢に直面して、修正と変更を必要とするものが数多く内蔵されていたからである。第七回大会当時まで、コミンテルンのとってきた戦略戦術には、スターリン主義の命題に基礎を置く、決定的な欠陥が隠されていた。事実、レーニン主義の時代とスターリン主義の時代とでは、コミンテルンの歴史評価のうえで、大きな屈折面を指摘することができる。レーニンのコミンテルンにたいする能動的な関与にくらべ、スターリンは、コミンテルンの活動の表舞台には一度も登場せず、従って、「直接に責任が一度もなかった」（トリアッティ、前掲書、一二九頁）にもかかわらず、コミンテルンの諸決議や諸指令を再評価する場合には、彼の影の関与の浸透性を正しく処理しなければならない。スターリン主義とコミンテルンの活動の相互関係の検討は、今でも、コミンテルン研究の最大の盲点として残されているからである。第七回大

会は、その盲点を解明するいくたの素材を秘めている。例えば、一九二一年のコミンテルン第三回大会、一九二二年のコミンテルン第四回大会で正しく提起された労働者政府もしくは労働者農民政府という構想は、一九二四年のコミンテルン第五回大会では、プロレタリアート独裁政府（ソヴェト政府）と同質のものと固定化され、レーニンが主張したプロレタリアート独裁政府に移行ないし接近する政府形態の多様性は、完全に否定されてしまった。従って、第三回、第四回大会で定式化された統一戦線戦術は、この独裁政府を樹立するために、大衆を扇動し、革命的に動員する戦術として固定化され、中間の浮動する諸勢力が主要打撃の目標として設定されてしまった。また、一九二八年のコミンテルン第六回大会以降、社会民主主義が全体としてファシズムの主な支柱と規定され、さらに、社会民主主義を社会ファシズムと断定し、とりわけ、左翼社会民主主義がファシズムの最大の支柱であり、共産主義の最悪の敵であると規定したために、コミンテルンは、統一戦線戦術の適用を自らの手で断ち切ってしまった。下からの統一戦線は上からの統一戦線と機械的に対置され、統一戦線戦術は、右翼社会民主主義指導部の暴露方法として狭溢化されてしまった。社会民主主義政党と峻別される共産主義政党のボリシェヴィキ化というスローガンは、ソヴェトの経験の一義的な踏襲を指向するものであった。また、植民地、従属諸国の民族解放運動では、一律に、プロレタリア、農民による労農民主独裁からプロレタリアート独裁という性急な革命のスローガンが定式化され、中間勢力としての民族ブルジョアジーや小ブルジョアジーが主要打撃の目標として設定されてしまった。このような誤った諸命題は、ファシズムの攻勢と世界戦争の脅威が差し迫った一九三〇年代には、抜き差しならないほど致命的な欠陥となっていた。レーニンが、一九二〇年のコミンテルン第二回大会の約三か月前に発表した論文『共産主義内の「左翼主義」小児病』のなかでは、主要でない危険性をもつものと指摘されていた教条主義や極左（セクト）主義が、今や主要な危険性をもつものとしてその症状が重くなっており、第七回大会では、コミンテルンの従来の戦略戦術論に、根本的な検討を加えて訂正するという歴史的任務が課せられていたのである。

事実、一九三五年の夏ごろになると、コミンテルンは、すべての焦眉の問題にたいして、現実の深いマルクス・レーニ

ン主義的分析に基づいて、「諸共産党が蓄積したゆたかな経験を考慮する答えをあたえることができるようになった。」（B・レイプゾン、K・シリーニャ、前掲書、一一八頁）第七回大会で確立された新しい中心思想は、およそ次のようなものであった。ディミトロフ報告が明示したように、コミンテルンにとって、ファシズムこそが主敵であり、ファシズムに対抗する闘争に勤労人民大衆を動員するためには、「プロレタリア統一戦線を基礎とする広範な反ファッショ人民戦線の結成」（ディミトロフ、勝部訳『反ファシズム統一戦線』国民文庫、四四頁）を行なうことがとくに重要な任務であり、そのため、労働組合を統一し、社共の統一戦線を実現し、広範な中間層・非プロレタリア階層を結集することが、緊急の任務であるという原則が明らかにされた。「プロレタリア独裁かブルジョア民主主義かではなくて、ブルジョア民主主義かファシズムか」（ディミトロフ、前掲書、一三三頁）をはっきり選ぶべき時点では、ファシズムに対抗するために、労働者階級が何年ものねばり強い闘争の過程でかちとった民主主義のすべてのものを擁護し、拡大するための闘争を行なうべきであるという思想が高く掲げられ、かかる「積極的民主主義的スローガン」（ディミトロフ、前掲書、一三四頁）を提起する過程において、プロレタリア統一戦線政府または反ファッショ人民戦線政府を樹立することができるし、そのときの実際の情勢如何によって、共産主義者がこの政府に参加する問題が決定されるという原則が確認された。ただし、究極の解決は、社会主義革命、ソヴェト権力だけがもたらしうることを付言することを忘れなかった。また、植民地や半植民地では、反帝国主義的統一戦線を結成する課題が提起され、民族ブルジョアジーを含めた反帝国主義諸勢力を結集して、反帝国主義的統一戦線政府を樹立し、植民地および従属国諸国の民族解放運動と帝国主義諸国の労働者階級との革命的同盟を強固にする必要が強調された。つぎに、エルコリ（トリアッティ）報告が明示したように、新しい国際情勢を分析して見ると、平和のための闘争が、以前にくらべて現在よりよく成功する見込みがあり、以前の戦争宿命論とはちがって、「戦争をひきのばすことが可能であるだけでなく、新しい帝国主義戦争の勃発を防止することさえ可能である」（トリアッティ、前掲書、一一七頁）という命題を打ちだし、平和のための闘争を当面の中心任務として設定し、「真に正しく社会主義的な事業、平和の事業のための闘争を

おこなう」(トリアッティ、前掲書、一一九頁)ために、広範な人民を結集する必要のあることを明らかにした。最後に、以上の任務を首尾よく果すための主体的条件としての共産党の強化の問題では、深く根ざした病気にまで成熟したセクト主義、教条主義を克服し、プロレタリア国際主義を高揚する必要のあることが強調された。また、コミンテルン本部(モスクワ)からの指導が事実上不可能となってきたために、各国支部の自主性を強化すると同時に、各支部間の適時の協議や経験の交流を推進することが提示された。

三

一九二九年の世界経済恐慌を画期としてはじまった、コミンテルンの歴史の第三の時期は、世界政治が転換の兆を見せる時期であった。この時期に、コミンテルンのとった立場と行動には、決定的とも思える立ち遅れと誤謬があった。それは、主として、「ファシズムの脅威について時期に適さない不完全な評価と、その結果、行動の統一と社会民主主義諸党にたいしてとるべき立場の問題のまちがった提起」(トリアッティ、前掲書、一五三頁)の二つに要約することができる。ファシズムの不完全な評価と社会民主主義諸党にたいするまちがった評価は、コミンテルン第七回大会で訂正され、新しい評価を基にして、正しい戦術が編みだされたのである。ファシズム論と社会民主主義論に焦点を合わせて、第七回大会論を展開して見よう。

第七回大会で、ディミトロフは、ファシズムの階級的性格について、一九三三年のコミンテルン執行委員会第一三回総会が定式化したように、「権力をにぎったファシズムは、金融資本のもっとも反動的な、もっとも排外主義的な、また、もっとも帝国主義的な要素の公然とした暴力的独裁である。」(ディミトロフ、前掲書、九頁)と規定した。この規定は、スターリンによってなされた(マルチェッラ・フェルラーラ、マウリツィオ・フェルラーラ、石堂・上杉訳『トリアッティとの対話』(下)、三一書房、五六頁)。ところで、この規定には、「それが高度に発展した独占資本の国の条件にとっては絶対に正しかった

が、中程度の資本主義やその他の国にとっては、一定の修正を必要とするという欠陥もあった。」（B・レイプゾン、K・シリーニャ、前掲書、一四三頁）「ファシズムは金融資本そのものの権力である。」（ディミトロフ、前掲書、一〇頁）という規定も、同様に、修正を必要とする規定であった。資本主義が中程度の発展水準にしか達していなくて、著しく封建遺制の残っているスペインや日本、それに東ヨーロッパ諸国、例えば、ポーランド、ルーマニア、ユーゴスラヴィア等のファシズムの階級性を規定するには、まさにこの種の変更が必要であった。また、ディミトロフは、一九三四年にスターリンがソ連共産党（ボルシェヴィキ）中央委員会の活動にかんする第一七回大会への一般報告で述べた言葉を引用しながら、ファシズムの勝利は、プロレタリアートの弱さを証明するものではあるが、他面、「ブルジョアジー自身の弱さをもあらわしている」（ディミトロフ、前掲書、八頁）と述べている。この表現は、一般史論としては正しいが、文字通りに運用されると、ファシズムが自動的に内部から崩壊するであろうという、ヴィジョンを生みかねない危険性を内包していたといえよう。

第七回大会のファシズム論にも、このような問題点が指摘されるが、一九二〇年代末期から一九三〇年代の初期にかけて、コミンテルンが行なったファシズムの本質やその主要な特徴についての規定には、ある種のセクト主義的な傾向が見られた。ファシズムの過小評価は、一九三三年一月のドイツ・ファシズムの権力掌握ののちまで、コミンテルンのより正確なファシズム規定を延引させた主要な要因であったといえよう。ファシズムの危険を過小に評価する態度は、一連の社会改良主義的、小ブルジョア的あるいはブルジョア政治的な潮流を、一把一からげに、ファシズムと同一視したり、また、ファシズムが、単にコミュニズムだけでなく、ブルジョア民主主義そのものを撲滅する危険性をもっていることを、過小に評価する態度と、裏腹だったのである。このような左翼セクト主義を生みだした、この時期のコミンテルンは、客観情勢を資本主義か社会主義か、のちには、ファシズムか社会主義かの選択と考え、ファシズムが、結局は、全資本主義社会の革命的危機の成熟をスピード・アップすると認識することによって、高度に発展した資本主義国家群において、一九二八年のコミンテルン第六回大会で採択された綱領の指示する、社会主義的変革に全力を注入するという方針を、一貫してとっていたのである。

ファシズムの権力到達によって変化した諸条件を考慮して、ディミトロフは、ブルジョア独裁の普通の支配形態とファシズムの政治形態とを区別し、「ファシズムが権力に到達するのは、一つのブルジョア政府のあとに他のブルジョア政府がつづく、というふつうの形ではなくて、ブルジョアジーの階級支配の一つの国家形態―ブルジョア民主主義―が、他の形態―公然とした暴力的独裁にとりかえられることを意味する。」（ディミトロフ、前掲書、一一頁）と述べ、コミンテルン陣営内に、今日にいたるまでなお、「ファシズムの危険にたいするゆるすことのできぬ過小評価」（ディミトロフ、前掲書、二五頁）が克服されておらず、また、いくつかの国々では、『ファシズムにたいする大衆闘争の必要な発展が、ファシズムの性質「一般」にかんするみのりのない議論によっておきかえられ』（ディミトロフ、前掲書、二六頁）、それがまた、当面の政治的任務を定式化し解決するにあたっての「せまいセクト主義的態度によっておきかえられた」（ディミトロフ、前掲書、二七頁）誤謬を、鋭く指摘した。

社会民主主義諸党にたいするまちがった評価のうちで、「社会民主主義を社会ファシズムと規定したことが、もっとも重大なあやまり」（トリアッティ、前掲書、一五三頁）であったし、また、「共産党の政策を《階級対階級》の政策とする規定も、やはり本質的にまちがって」（トリアッティ、前掲書、一五五頁）いた。社会民主主義にたいする新しい方針を作成するさいに、ディミトロフが、一九三四年七月一日に、大会日程第二項（前掲ディミトロフ報告）小委員会に宛てた手紙と、「ファシズムの攻勢とファシズムに反対する労働者階級の統一のための闘争におけるコミンテルンの任務」についての報告要領で、提起した問題点は、きわめて比重の高いものであった。ディミトロフは、そのなかで、「Ⅰ　社会民主主義について　1　社会民主主義を一括して社会ファシズムと判定するのは正しいことであろうか？われわれはこの方針によってしばしば社会民主主義的労働者に近ずくことをみずからさまたげてきた。2　いたるところで、またどんな事情のもとでも社会民主主義を、ブルジョアジーの主要な社会的支柱とみなすのは正しいことであろうか？3　すべての左翼社会民主主義集団を、事情のいかんを問わず主要な危険とみなすのは正しいことであろうか？4　社会民主党と改良主義労働組合のすべ

ての指導的カードルを一括して、労働者階級の意識的裏切者として扱うのは正しいことであろうか？」（ソ連邦共産党中央委員会付属マルクス・レーニン主義研究所、石堂訳「共産主義インタナショナル第七回大会のためのゲ・エム・ディミトロフの文書」『歴史評論』一九八号、春秋社、三一頁）などの諸点をあげて、討論の素材としたのである。

第七回大会までのコミンテルンは、社会民主主義を社会ファシズムと規定し、この規定から特定の政策を引き出していた。すでに一九二四年に、スターリンは、『国際情勢について』という論文のなかで、社会民主主義が客観的にはファシズムの穏和な一翼であると規定し、つづいて、一九二九年のコミンテルン執行委員会第一〇回総会は、社会民主主義をはっきり社会ファシズムと評価した。かくして、スターリンの基本的な戦略に従って、共産党の主要打撃の目標が、中間的、階級協調主義的な社会民主主義諸党に、のちには、その左翼に向けられてきた。ヨーロッパ諸国、とくに、ドイツにおいて、右翼社会民主党指導者たちが、ファシストと同じように、大衆の革命運動を武力で強圧したことは事実であったし、階級協調を唱える社会改良主義者のイデオロギーと、ファシストのいくつかのイデオロギーとに、接点があったことは事実であったけれども、「この二つの運動の社会的性質はまったく異なっていた。」（トリアッティ、前掲書、一五四頁）ファシズムの背後には、資本のもっとも反動的なグループがいたが、社会民主主義者は、まだ一種の民主主義的伝統とブルジョア平和主義を重んじるグループと同盟関係を結んでいた。また、「二つの運動の大衆的基盤も異なっていた。」（トリアッティ、前掲書、一五四頁）社会民主主義者の指導する組織内には、多くの国で、なお大多数の労働者や勤労者がいた。ファシズムの暴力が、社会民主主義組織を破壊しはじめると、社会民主党のかなり重大な部分が、民主主義擁護のために立ち上がろうとしていたし、また、事実立ち上がった。

社会ファシズム論は、フランス、オーストリア、スペインなどで現実に発展してきた反ファシズム闘争の過程で、再検討された。もちろん、ディミトロフが第七回大会で指摘したように、社会民主主義政党の指導者たちは、ファシズムの真の階級的性質を認識することができず、ブルジョアジーの反動的な諸方策（ファッショ化過程）の高揚にたいして闘争を

よびかけず、また、ファシズム攻勢の決定的な瞬間に、ドイツその他の諸国で、大衆の抵抗を準備しなかったという事実にたいして、「もっとも大きな歴史的責任を負う」(ディミトロフ、前掲書、一二頁)グループであった。この指導者たちは、ブルジョアジーとの階級協調政策をとったために、労働者階級を分裂させ、彼らを政治的・組織的に武装解除させた、極右翼もしくは右翼社会民主主義の指導者たちであったと、その範囲を限定しなければならなかった。彼らは、労働者階級の名のもとに事実上反農民的政策をとり、その政府のどれ一つとして、農民の貧困を解決せず、また農民に土地をあたえなかったから、プロレタリアートをその本来の同盟者から孤立させる状態においこんだ。また、彼らは、労働者階級の青年層を階級闘争からそらせ、彼らの特別な利益と要求のための闘争に十分な注意をはらわなかった。ディミトロフは、コミンテルンの直面する戦術問題の観点から、社会民主主義が現在もなおブルジョアジーの主柱であるという評価を再検討し、若干の国々では、ブルジョア国家内での社会民主党の地位と、そのブルジョアジーにたいする態度とが変化しつつあるということに、留意すべきであると指摘した。彼は、その理由として、第一に、恐慌が労働者階級のうちのもっとも安定している部分、いわゆる労働貴族といわれている部分の地位をゆさぶったこと、第二に、若干の国のブルジョアジーは、みずからブルジョア民主主義を放棄し、社会民主主義から以前の地位だけでなく、一定の条件のもとでは、その合法的地位さえもうばい、彼らを訴追し、弾圧さえしていること、第三に、ドイツ等で、社会民主党がブルジョアジーと階級協調政策を行なった結果、労働者が敗北したことからまなんだ教訓の影響と、また、ソヴェトにおける社会主義の勝利の影響を受けて、社会民主党傘下の労働者が革命化し、ブルジョアジーにたいする階級闘争の方向に転換しはじめたことが、指摘できると考えた(ディミトロフ、前掲書、一二五―一二六頁参照)。それらの結果として、すべての社会民主党の内部で分化過程がおこり、その隊列のなかに二つの主要な陣営が形づくられ、反動的分子の陣営とならんで、「ブルジョアジーとの階級協調政策の正しさに疑問をいだき、共産党員との統一戦線の樹立に賛成し、ますます革命的階級闘争の立場をとるようになりつつある革命的分子の陣営の結成」(ディミトロフ、前掲書、三三頁)がはじまった。正真正銘の左翼的グループと潮

流が発生したことによって、社会民主主義がブルジョアジーの城塞であり、ファシズムの一翼であり、ファシズム以上に社会民主主義（とくに、その左派）に主要打撃の方向を向けなければならないという考え方が、清算されることとなった。

四

ファシズムの性格をはっきりと規定し、社会民主主義にたいする左翼セクト主義を清算したのちに、資本の攻勢とファシズム攻勢、さらに、戦争の脅威に対抗するプロレタリア統一戦線あるいは反ファッショ人民戦線の思想と行動が、醸成されてきた。統一戦線および人民戦線は、何よりも危殆に瀕した自由と民主主義と平和の防衛を、その内容としていた。第七回大会で、統一戦線の方式は、ディミトロフによって、次のように規定された。「まず第一になすべきこと、それから手をつけるべきことは、統一戦線を結成すること、すべての工場、すべての地区、すべての地方、すべての国で、全世界で、労働者の行動の統一をうちたてることである。一国的および国際的規模でのプロレタリアートの行動の統一こそ、労働者階級にファシズムにたいする、階級敵にたいする防衛の成功を可能にするだけでなく、また反撃の成功を可能にする強力な武器である。」（ディミトロフ、前掲書、三四頁）と。統一戦線は、政党、労働組合、協同組合、青年組織、婦人組織等の間での政策協定および何よりも行動の統一を意味した。統一戦線は、単に共産党員と社会民主党員だけでなく、カトリック、アナーキスト、それに未組織の一般労働者等の間でも確立されるだけでなく、植民地や半植民地の被抑圧民族のなかにも、同盟軍となりうる味方をもっていた。プロレタリアートの強力な統一戦線を基礎として、勤労人民の他のすべての階層、すなわち農民、都市の小ブルジョアジー、インテリゲンツィアとの闘争同盟を樹立する必要が強調された。人民戦線の結成が、すなわちそれである。統一戦線の中核となる組織は、諸工場、失業者、労働者地区、小都市の住民、諸村落で、統一戦線の選出された「無党派的階級機関」（ディミトロフ、前掲書、四三頁）を結成することであった。第七回大会で定式化された統一戦線、人民戦線は、第三回、第四回大会で結晶を見た統一戦線戦術の歴史的継承・発展形態であった。

反ファッショ人民戦線の結成という思想と行動のなかで、ブルジョア民主主義の評価と来るべき社会変革との関連の問題は、とりわけ、コミンテルン第七回大会論の最大の焦点であった。ファシズムが権力を掌握することによって、民主主義のための闘争は、国際共産主義運動にとって、単に植民地や半植民地の問題であるだけでなく、資本主義が高度に発展している国々においても、緊急の問題となった。ディミトロフは、第七回大会で、レーニンが『社会主義革命と民族自決権』のなかで述べた、次の言葉を想起させた。すなわち、「民主主義のための闘争がプロレタリアートを社会主義革命からそらせるかもしれないとか、それをあいまいにさせるとか、隠蔽するとかと考えることは、根本的な誤りであろう。反対に、社会主義は完全な民主主義を導入しなければ勝利しえないと同様に、プロレタリアートは民主主義をかちとるために、多面的な、一貫した、革命的な闘争をおこなわないかぎり、ブルジョアジーにたいする勝利を準備することはできないだろう。」(ディミトロフ、前掲書、一三四頁)ところが、コミンテルン第六回大会の綱領では、発達した資本主義国家群では、プロレタリアート独裁への直接の移行という戦略目標が設定されていて、民主主義のための闘争は、社会主義のための闘争を後背に押しやるものとして、過小評価されていた。ところが、民主主義的自由や権利を、ことごとく抹消してしまう反動とファシズムが襲来している情勢のもとでは、民主主義の過小評価に終止符を打つ必要が生まれた。第七回大会で、ディミトロフは、「われわれは、ソヴェト民主主義、つまり世界でもっとも首尾一貫した民主主義である勤労人民の民主主義の信奉者である。だが、われわれは資本主義諸国では、ファシズムとブルジョア反動によって攻撃されているブルジョア民主主義的自由のどんなきれはしでも擁護するし、将来も擁護しつづけるであろう。」(ディミトロフ、前掲書、三八頁)と報告した。大会で決定されたプロレタリア統一戦線政府もしくは反ファッショ人民戦線政府は、なによりもまず、ファシズムと反動に反対する闘争をおこない、民主主義の諸成果のすべてのものを防衛し、また拡充するために、断固として闘争する政府として構想された。共産主義者は、ブルジョア民主主義に限界があるということを理解していても、ブルジョア民主主義が、プロレタリアートの階級闘争の発展のために、一定の可能性をつくりだすという点で、ファシズムという支配形態にく

らべて、はるかにすぐれた政治形態であるということも理解した。こうして、人民大衆が多年の闘争で闘いとった、人民的内容と結びついているか、または人民的内容で満たすことのできるブルジョア民主主義的自由と権利をまもり、さらにひろげる運動を通じて、資本の権力を制限し、人民のための新しい政策の遂行を実行し、積極的民主主義を実質的、経済的に獲得するという思想が、発芽していた。この民主主義は、発達した資本主義国家群では、社会主義革命闘争にとって有利な条件をつくりだすことのできる、人民的内容の付加した民主主義であった。しかし、問題解決のための実践データが不足していたために、「民主主義のための闘争と社会主義のための闘争の相互連関のあたらしい問題のすべてを大会が徹底的に明るみにだすことはできなかった。」(B・レイプゾン、K・シリーニャ、前掲書、一八六頁)ともあれ、反ファッショ人民戦線の思想は、ブルジョア民主主義、議会主義的民主主義の擁護と拡大を通じて、労働者階級の行動統一と労働者階級と中間諸層の同盟を実現し、ファシズムと戦争に対処していく戦術を意味した。この戦術は、第四回大会の統一戦線戦術の歴史的継承であるとともに、第五回、第六回大会のスターリン主義によるそれの歪曲を、実質的に克服したものと評価することができよう。

トリアッティが述べているように、コミンテルン第七回大会は、フランス、スペイン、オーストリア、イタリアにおける社共の統一、中国における全民族勢力の統一という経験を一般化する任務を果たし、その経験に確固とした理論的基礎をあたえ、この基礎のうえに立って、「世界的な規模の戦略展開方針をうち出した。」(トリアッティ、前掲書、一五七頁)彼は、統一戦略は、第七回大会で、ねり上げられ、世界に提示されたと指摘する。また、統一戦線、統一戦線政府、ブルジョア民主主義擁護、新しい社会民主主義観などの方針は、「もはやたんに戦術であるだけではなく、戦略的なものともなった。」(トリアッティ、前掲書、一五八頁)と述べている。さらに、新帝国主義戦争を回避することができるという可能性を指摘し、新しい型の民主主義という概念が生まれたと考え、コミンテルンが、勇敢に権力理論を展開し、民主主義的大衆運動に勝利の前進の展望を開き、「反ファシズムと平和擁護の闘争を資本主義社会の構造を革新する必要と直接に結びつけた。」(トリアッティ、前掲書、一六〇頁)と指摘している。

ところが、B・レイプゾンとK・シリーニャは、さらにすすんで、第七回大会の方針を、新しい戦略、新しい民主主義、民主主義・社会主義闘争等と断定している。人民戦線政策は、「ファシズムに反対し、民主主義とその拡大のための闘争をつうじて社会主義にすすむ道を示した共産主義運動のあたらしい戦略の、きりはなすことのできない一部分となった。」（B・レイプゾン、K・シリーニャ、前掲書、二一九頁）と指摘している。人民戦線綱領の実現は、反独占的内容をもつものであり、フランス共産主義者が提出した「民主主義的自由の擁護は、これを拡大する闘争なしには不可能である」というテーゼは、「社会主義へのあたらしい接近路をひらくあたらしい民主主義の反ファショ的、反独占的指向の思想を、言葉だけかえて表現したものである。」（B・レイプゾン、K・シリーニャ、前掲書、二二六―二二七頁）とも指摘している。また、統一戦線と人民戦線政策は、社会主義革命の任務を、いつとさだかでない先にのばすことを決して意味せず、反対に、反ファッショ一般民主主義的闘争は、社会主義革命への成功的な道をひらいた。「民主主義のための、ファシズムと戦争に反対するための闘争をつうじて社会主義へ―これがあたらしい共産主義戦略の主たる意味であった。」（B・レイプゾン、K・シリーニャ、前掲書、二三二頁）とも述べている。

統一戦線および人民戦線方式は、単なる戦術として終始する性格のものではなく、若干の国で、当時のコミンテルンの戦略を修正する内容を胚芽としてもっていたと評価することができる。しかし、コミンテルンは、第七回大会の時期に、かかる新しい戦略を発想できる認識段階にはたっしていなかった。コミンテルンは、若干の国では、統一戦線政府が、プロレタリア革命へのもっとも重要な移行ないし接近の形態の一つであると考えられたが、その転化の過程と形態としては、ソヴェト革命方式だけが考えられていた。統一戦線政府は、「究極的な解決をもたらすことはできない。それは搾取者たちの階級支配を転覆することはできない。そこで、こういう理由で、ファシスト反革命の危機を最後的にとりのぞくことはできない。だから、社会主義革命の準備をする必要がある！ソヴェト権力、ただソヴェト権力だけが救いをもたらしうるのである！」（ディミトロフ、前掲書、八九―九〇頁）これこそが、発達した資本主義諸国が直面していた、当時の戦略目標だっ

たのである。ディミトロフは、統一戦線政府はブルジョア独裁からプロレタリアート独裁に移行する過渡的段階であることを、語気強く否定した。従って、革命の展望をソヴェト権力形態として前提するならば、統一戦線および人民戦線は、戦術として考えられるが、もしその展望を統一戦線政府もしくは人民戦線政府を頭部とする議会制民主共和国権力形態として前提するならば、それは、戦略として位置づけられたであろう。第七回大会の構想は、前者の前提を固守しつづけた。

このように見てくると、トリアッティのいう戦略は、当時の差し迫ったファシズムと資本攻勢と戦争の脅威に直面し、平和と民主主義を守りぬくという緊急な情勢のなかで、人民戦線が反ファシズムの有効な戦略的戦術であったというように解釈すべきであろう。すなわち、社会主義革命（ソヴェト革命）という第二目標以前の反ファシズム闘争という第一目標を設定したという意味で、統一戦略が述べられているのであり、新しい戦術設定だけでなく、その戦術が戦略それ自体を揺り動かすほどの深さをもっていたというように、理解しなくてはならないであろう。ところが、B・レイプゾンやK・シリーニャの新しい戦略や反ファッショ一般民主主義的課題等の論述は、たとえ、それらが胚芽形態として、第七回大会の決定のなかに潜んでいたとしても、第七回大会後の経験の一般化から逆に、第七回大会の新しい方針を評価するという欠陥を含んではいないであろうか。彼らは、スターリンの図式が、新しい方針の実行を牽制したと考え、第七回大会は、権力獲得のためには、中間的目標のための闘争を経て、大衆を社会主義革命にみちびく必要があることから出発し、「平和と民主主義のための闘争が、実質上、革命運動の当面の段階の戦略的任務として正面におしだされたのである。だがこのことは、大会では十分にきっぱりと強調されなかった。いくつかの発言で、大切なのは古い方針を発展させることであり、コミンテルンの戦略は不変であって、その実行上におかされた誤謬を訂正さえすればよいということを示そうとする企てがなされた。ブルジョア革命ののちには、労働運動の戦略段階は、プロレタリアート独裁のための闘争というただ一つの直接的目的をもっているという普遍的図式の誤りを言わずにおいたため、あたらしい方針をちがって解釈する根拠をのこした。」（B・レイプゾン、K・シリーニャ、前掲書、三二五頁）と述べている。しかるに、第七回大会では、ソヴェト形態で

のプロレタリアート独裁の樹立という条件が、社会変革の唯一の形態として提起され、反ファシズム論は、戦術討議として終始したと考えられる。事実、ディミトロフは、一九三四年七月二日、大会日程第二項問題の小委員会の会議において、「大会日程第二項の重要点となるのは戦術方針、戦術問題、共産主義インタナショナルとわが諸共産党の戦術でなければならないと思う。それは、周知のように（そして諸君も同意されるであろうが）、わが諸党の最大の弱点が、まさに戦術の分野にあるだけに、なおさらそのようにいえるのである。私見では、最大の混乱は、戦術問題の分野に存在している。」「だから私は、最近の諸事件の経験にもとづき、われわれの戦術、われわれの方針、われわれの活動方法の評価の再検討を、大胆に、故障なく、そういってよければ、拘束となる既存の戦術方針をかえりみることなしに、遂行すべきであると思う。」（前掲、共産主義インタナショナル第七回大会のためのゲ・エム・ディミトロフの文書、三五頁）と発言している。従って、ディミトロフの考え方のなかには、戦略の大胆な変更という課題はなかったといってよいであろう。統一戦線や人民戦線運動は、ブルジョア民主主義の肯定面を積極的に擁護するなかで、ファシズムに対抗し、将来の社会主義革命の主体的条件を強化する戦術であった。しかし、ディミトロフらが指向したソヴェト革命は、ブルジョア民主主義にかわるソヴェト民主主義のうえに立って、資本主義を革命的に打倒し、ソヴェト権力を樹立する戦略であった。第七回大会後、とくに戦後に定式化された議会主義の肯定のうえに立つ議会制民主共和国構想や民主主義・社会主義革命という、西ヨーロッパ型社会主義革命の戦略は、当時、まだ発芽していなかったのである。

《主要参照文献》

1 The Communist International. 1919-1943. Documents. Vol. III. Oxford University Press. 1965.

2 W.Z. Foster, History of the three Internationals. N. Y. 1955. 邦訳、長洲、田島訳『国際社会主義運動史』下、大月書店。

3 F. Borkenau, European Communism. N. Y. 1953.
4 F. Borkenau, World Communism. The University of Michigan Press. 1962.
5 ノヴェト大百科辞典『インタナショナル小史』国民文庫。
6 山辺健太郎『コミンテルンの歴史』新興出版社。
7 ディミトロフ、勝部訳『反ファシズム統一戦線』国民文庫。
8 ピーク『反ファシズム統一戦線の経験と批判』社会書房。
9 トリアッティ、石堂・藤沢訳『コミンテルン史論』青木文庫。
10 津田・野村・久坂『現代コミュニズム史』上下、三一書房。
11 講座『現代のイデオロギー』第三巻、三一書房。
12 講座『現代マルクス主義』Ⅲ、大月書店。
13 横越英一『政治学体系』勁草書房。
14 セレーニ『コミンテルン第七回大会』上下、『国際評論』一九六一年一二月号、一九六二年一月号、合同出版社。
15 ア・エル・コルスーンスキー、加藤訳『労働者の統一と人民戦線にかんするコミンテルン第七回大会』1、『歴史評論』一九六一年一二月号、春秋社。
16 R. Palme Dutt, The Internationale. London. 1964. 邦訳、佐野訳『世界社会主義運動史』上、合同出版。
17 B・レイプゾン、K・シリーニャ、石堂訳『現代革命の理論—コミンテルンの政策転換—』合同出版。
18 レイプゾン、シリーニャ『共産主義インタナショナル第七回大会』『平和と社会主義の諸問題』一九六五年八月号。
19 ポメロフ『反帝勢力の統一のための戦略』『新世界』一九六五年一一月号。
20 ルミャンツェフ『コミンテルン第七回大会の歴史的意義と現代の共産主義運動』社会主義政治経済研究所『研究資料』一九六五年第一一号。

21 ベルスキン、ソコロフ『すべての革命勢力の団結は時代の命令である』『インタナショナル』一九六五年一一月号
22 デュクロ『コミンテルン第七回大会とフランスの人民戦線』『インタナショナル』一九六五年一二月号。
23 ジュラフスキー『共産主義隊列のために、国際的団結のために』『インタナショナル』一九六六年一月号。
24 マグリ『人民戦線の経験の意義と限界』社会主義政治経済研究所『研究資料』一九六六年第二号。
25 『国際主義の思想の不敗の力（コミンテルン第七回大会三十周年記念国際会議）』『平和と社会主義の諸問題』一九六五年一二月号。
26 鶴田三千夫『コミンテルン第七回大会の歴史的意義』『新世界』一九六六年一月号。
27 Georges Cogniot, Le VIIe Congrès de l'Internationale communiste et le mouvement ouvrier et démocratique de France. Cahiers du communisme. Dec. 1965.
28 ベルティ『イタリア共産党とコミンテルン』『インタナショナル』一九六七年一月号。
29 アメンドラ『フランス人民戦線とイタリアの反ファシズム』『インタナショナル』一九六七年三月号。
30 ソ連邦共産党中央委員会付属マルクス・レーニン主義研究所、石堂訳『共産主義インタナショナル第七回大会のためのゲ・エム・ディミトロフの文書』『歴史評論』一九六七年二月号、春秋社。
31 マルチェッラ・フェルラーラ、マウリツィオ・フェルラーラ、石堂・上杉訳『トリアッティとの対話』下、三一書房。
32 『トレーズ政治報告集』第一巻、未来社。
33 嶋崎譲『コミンテルンと統一戦線』『法政研究』第三二巻第二—六合併号。
34 J. Freymond, Contributions à l'histoire du Comintern. Genève. 1965.
35 M. M. Drachkovitch, The Revolutionary Internationals. 1864-1943. California. 1966.
36 M. M. Drachkovitch and B. Lazitch, The Comintern-Historical Highlights. N. Y. 1966.
37 Annie Kriegel, Les Internationales ouvrières (1864-1943). Paris. Presses Universitaires de France. 1964. 邦訳、野

38

沢・秋沢訳『インターナショナルの歴史』白水社。

拙稿『フランス人民戦線運動論（二）』『社会科学報告』第九号。

―一九六七・一〇・一一―